

## 真言密教における行位体系について②

— 幸心流伝法灌頂の儀式を中心に —

布施 浄 明

### 【序論】

「真言密教の行位」とは、弘法大師が中国で惠果阿闍梨より伝承し、日本において独自に展開し、現在も行われている真言密教の修行体系の総称である。

本論では、伝法灌頂の儀式を取り上げて、大師以来の伝統的真言密教の行位体系（ここでは幸心流を例に挙げる）と、真言宗智山派が宗制で規定した、本宗僧侶の履修すべき所定の「行位」の格差を明らかにし、行位履修の本来的在り方を模索する。

智山派所定の行位は「得度↓加行↓入壇↓練行↓両大会」である。

幸心流の伝統的行位体系は「得度↓印可↓傳授（受明灌頂）↓加行↓入壇（伝法灌頂）」である。

伝統的行位体系に、「印可↓傳授↓修法↓悉地」という視点を加えてみると、行位体系の本来の形態の一端が見えてくるのではないか。昨今の行位履修において、何故に「印可↓傳授」が省略されてしまったのだろうか。その背景

を「動潮傳授手鑑」を中心に、「日秀相承傳授目錄」・「洞泉性善傳授目錄」を参照して検討してみたい。今回は受明灌頂についてその内容と意義について論じてきたが、今回は特に伝法灌頂のその構成と意義について考察し、本来的な灌頂の在り方を見ていきたい。

【前回までのあらすじ】

論題の「真言密教における行位体系について」は、弘法大師が中国より請来し、日本において独自に展開し、後世種々の流派に分かれ、現在伝承されている「真言密教の行位」をここでは意味する。「行位」とは、真言僧侶が履修すべき所定の修行過程のことである。本宗では、「得度—加行—灌頂—練行—両大会」(縦のラインとする)という段階を経て「菩提心」を開発し、阿闍梨としての資格を得る。しかし、現在では時間的に短縮され、年々簡略となり僧階を取得できるようになっている。ここでは過去においてそういった行位の体系がどうかあったのかを探りたい。そこで、日秀相承傳授目錄／洞泉性善傳授目錄／動潮傳授目錄を使って当時の行位体系を調べ、「密教事相研究会」(智山伝法院)提示の「印可—傳授—修法—悉地」(横のラインとする)という流れを、行位の在り方の典型の一つとして見る。さらにその傳授目錄にある次第(十八道)を選び、現在行われている十八道(元杲)次第と比較し、本来あるべき十八道行法への取り組みを模索した。

その結果、真言密教における行位体系は、縦のライン「得度—加行—入壇—練行—両大会」に、横のライン「印可—傳授—修法—悉地」が、交差し合ひ、それぞれの行位過程を踏みながら、初めて真言行者としての行が遂行され、悉地を得、阿闍梨になるものであると思われる。現在は便宜上受明灌頂は略されているが、本来的行位を目指すならば、しっかりした形で受明灌頂を行位の中に位置付けることが望まれる。受明灌頂を行うにあたっては多少の時間が

かかるが、今行われている行位体系をもう一度見直し、本来あるべき姿を模索するためには、この「印可―傳授―修法」という流れの意義が問われる。「印可・受明灌頂」・「普通傳授」が復興されることが一流傳授再興の道につながると思われる。

【本論】

【傳法灌頂の意義】

一、灌頂の歴史

傳法灌頂の意義を考察にするに先ず宗祖大師がどのような灌頂を中国で受け、日本に帰ってどのように行ったか知る必要がある。しかし、ここでは簡単にその経過を見るにとどめる。宗祖大師が惠果和上より受法したのは『御請来目録』に

① 「我に授くるに発菩提心戒を以てし、我に許すに灌頂道場に入るをもつてす。受明灌頂に沐すること再三なり。阿闍梨位を受くること一度なり。」

宗祖大師は密教受法の為に、再三に渡り受明灌頂を受け、傳法灌頂への許可を得ていた。その後、惠果より密教秘伝の傳法灌頂を受けている。

② 「延暦二二四（八〇五）年六月上旬に学法灌頂壇に入る。この日大悲胎藏大曼荼羅に臨んで、法によって花をなげうつに、偶然に中台毘盧遮那如来の身上に着く。阿闍梨讚していわく、不可思議不可思議なりと。再三讚歎したもう。即ち五部灌頂に沐し、三密加持を受く。――中略――七月上旬に更に金剛界の大曼荼羅に臨んで重ねて五部の灌頂を受く。また花をなげうつに毘盧遮那を得たり。和上讚歎したもうこと前の如し。八月上旬にまた傳法阿

「開梨位の灌頂を受く」(真全「弘法大師年譜卷三下p46上」・「御請来目錄」)

宗祖大師は延暦二四年(八〇五)の六・八月に渡って灌頂を受けている。先ず胎藏界において学法灌頂(受明灌頂)を受け、次いで金剛界の学法灌頂(受明灌頂)を受けている。八月の傳法灌頂を受ける前に金胎の受明灌頂を受けていることが解る。しかし、残念なことに其の当時どのような次第で灌頂が行われたかは定かでない。推察するに「略出念誦經」が金剛智三藏の訳であり、金剛智―不空―惠果―空海という付法であることから恐らくこれを元に行われたに違いない。

もう一つ注目すべき点は、胎藏界を最初に受け、後に金剛界を受けていることである。宗祖大師が帰朝(八〇六)して最初に受明灌頂を行ったのは、弘仁三年(八一二)十一月に京都高雄寺において金剛界灌頂を行い、十二月に胎藏界灌頂を行っている。つまり金胎の順番が異なっていることである。これについては次回の研究にまわしたいと思う。

③ 「大師、実慧に傳法灌頂職位を授く。『兩部血脈私鈔』に、ケンショウウ秘伝鈔に云く。(元瑜記…一二二八―三一九西院流元瑜方の祖。)御年二十五、高祖に随いて職位を受け給う。貞記に曰く。大師曰く、我帰朝の後壇を立て資<sup>はから</sup>し為に五瓶を灑く云々、則ち御帰朝の最初に檜尾の御灌頂弘仁元年(八一〇)なり。」(真全「弘法大師年譜卷五 p85下」)

このことから、宗祖大師が帰朝して初めて傳法灌頂を行ったのは弘仁元年(八一〇)であることが解る。

※五部灌頂 五智(法界体性智・大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智)の瓶れを頭頂にそそぐ灌頂。金胎とも五部灌頂という。

二、灌頂について

灌頂の意義

先ず初めに「灌頂」についての概論を示しておきたい。「灌頂」という儀式は、僧階取得の為に最も重要な儀式の一つであることはあえて論じる必要もない。真言宗において「灌頂」は『金剛頂瑜伽中略出念誦經』・『大日經』・『大日經疏』の所説による。特に『大日經』・『大日經疏』では、「五種三昧耶」を説いており、「灌頂」に対するアプローチ的な論拠を示している。その中でも第四三昧耶が今回のテーマである「傳法灌頂」に相当する。『金剛頂瑜伽中略出念誦經』では、實際行われる次第が説かれている。そこでこれらの経軌における灌頂の構成を見てみると次のようである。

I 【大日經】秘密曼荼羅品（正蔵18・33・A）の説

「五種三昧耶とは、

①初めに曼荼羅を見、三昧耶を具足して未だ真実語を伝えざれば、彼の密印を授けず。

②第二の三昧耶は、觀聖天會に入れ、

③第三には壇印を具し、教修妙業に随え。

④また次に伝教を許し、具三昧耶を説く。

⑤印壇位を具すといえども、如教の所説未だ心灌頂を達せず。」

と説き、これに対して『大日經疏』卷15 (737. A) では次のように釈している。

「①第一はただ遙かに曼荼羅を見ることを得。いわく、曼荼羅を造る時、具足の曼荼羅を見んと謂うが如し。ただしに諸人ありて、善心を以て随喜して、礼拝して花香等を以て遙かに道場に散して供養をなし、是の如くの法會を見ることを得しむるが故に、無量の罪業、みな滅除することを得。然れども未だ彼の真言及び印を授くべ

からず。是第一なり。

②第二は（結縁灌頂）曼荼羅の座位を見る。いわく彼を引きて壇中に入れ、礼拝供養し、花を投げて本位に散らしむ。師彼に告ぐ、汝の花はその尊位の上に墜つと、為に本尊の名号を説き、並びに壇門の内に入れて悉く諸位を見ることを得しむ。此の人を説きて第二の三昧耶と名づく。もし真言及び印を請へば、亦所応の者に随いて之を授くることを得。

③第三は、曼荼羅及び印位を見、並びに諸事を作すとは、いわく阿闍梨首より末に至るまで此の人の為に灌頂を作す。乃至諸尊及び印等、一一の行法みな之を教授す。是は之第三なり。

④第四（事業灌頂）とは、すでによく真言門を修行するあらゆる法則に依り随う。いわく一一に通解し、具に縁壇所須の方便衆藝を知りて、師位にあるに堪え、師の意を悦可せしむ。師即ち為に傳授曼荼羅を造り諸の弟子を度して法をして久住せしめよ佛種を断ぜざるが故にと。是第四なり。

⑤第五は即ち是れ秘密三昧耶なり。教の所説の如く印壇配位みな見れども、もし此の壇に入ることを経ざれば、秘密の智生せず。この故にまさに秘密壇の中に於いて、法の如く灌頂を作すべし。是を第五と名づく。」

やうらに同卷15 (737. A-B) に於て、

「然も秘密曼荼羅にまた自ら五種あり。

①第一にいわく、師の所に於て真言印法を授得し、教に依りて修行して、瑜伽と相応すれば定中に於て諸尊の大会を見ることを得。然も未だ引入することを蒙らず。これを例せば第一の人の如きなり。

②次に第二の人はすでに秘密壇の中に引入することを蒙りて、巡禮供養することを得れども、而も未だ聖尊現に灌頂を為すことを蒙らざる等なり。

③ 第三は既に大聖衆の中に引入することを蒙りて、初より未に至るまで、一一の秘密の行、みな聖者の方便告示を蒙ること、第三の人の如し。

④ 四には善く秘要の道を修するを以て、現に諸尊のために秘密傳教の三昧耶を作すことを蒙る。即ち如来の所使として、如来の事を行ふなり。

⑤ 第五はすでに前の事を具して、また己身、大會の中に於いて、自ら阿闍梨の師と作ると見る。即ち一切の佛會を見る。乃至十世界微塵の大會、悉く能く之を集めて而もその中に彼の尊位に同ず。」

と説かれている。現在智山派で行われている灌頂はこの『大日経』・『大日経疏』で説く、「五種三昧耶」の理論にのっとったものである。行者（衆生）の心が「曼荼羅」（密教に触れる）を見ることによって次第に変化してゆくことが伺われる。この中でも第四三昧耶は、現今の伝法灌頂に相当するもので阿闍梨位を受け、密教秘奥の教えを伝える事を許可される灌頂である。

II 【『金剛頂瑜伽中略出念誦経』卷四（大正蔵18. 248. C）の説

『金剛頂瑜伽中略出念誦経』では灌頂の構成について入壇授法の式

「金剛弟子を壇場入り灌頂を與える法を明かす。

其の①阿闍梨先ず已に師に従つて、②法の如く具足して灌頂の法を受け、③三摩耶の軌則を明らかに解し、是を有し得る者は、應に是の如く請すべし。④當に具さに威儀を修すべし。⑤其の師の所に於いて如来想を生じ、合掌恭敬し、頭面頂禮し、手に師の足を按じて是を作して白して言うさく。

尊者は、即ち是如来なり。即ち執金剛なり。我今尊者に帰依し、正等菩薩を求学せん。金剛性淨と為すが故に、

淨戒律を求学せん。惟願わくは尊者、哀愍し攝受し諸々の最勝子の如く菩提の種子あるを見て、衆生を皆捨て置かざるべし。我今已に菩提心を発し、不退転位を建立せんと欲するが為の故に、曼荼羅に入ることを求む。惟願わくば尊者慈悲教示して、我をして盡く見、一切諸佛と共なる所の灌頂を受け、金剛・寶・蓮華・羯磨を被せしめ、及び本部の有る諸々の勝妙事を、願わくは皆攝受して悉く我に授与せしめ玉へ。我が身心を性淨ならしめ智慧を明了にして、大小乗の有る深義に於いて自然に開解せしめ、諸の梵天・帝釈・毘紐・路陀等の天、及び彼の部属の鬼神、荼吉尼等に於いて、我今一切衆生を利益し、成就して安楽を施さんと欲するが為の故に願わくは我盡く能く彼等の勢力を催伏せしめ玉え。願わくは我及び一切衆生、生死を離れて、涅槃に至るを得。諸々の聖者の相好具足して、如来に位に入る者の如きを云何が當さに得べきや。願わくは阿闍梨哀愍し誨し玉え」と説かれている。「大日経」・「大日経疏」が灌頂の意義について説かれているのに対し、「金剛頂瑜伽中略出念誦経」では、灌頂の構成が示されている。

①師に従う

②灌頂の法を受ける

③三摩耶の軌則を理解し、威儀を修す

④如来を思い浮かべる



⑤合掌・恭敬頭面頂禮・手に師の足を按じる

灌頂は、単に階取得の為に行われる儀式でなく、受者が阿闍梨に帰依し、無上正等菩提を得る為に行われるものである。『金剛頂瑜伽中略出念誦經』では、受者がどのように無上正等菩提を獲て行くのかその過程が説かれている。真言密教行位体系の初めに「出家得度」がある。勿論真言密教は出家教団であるが、行者（この時点では在家）は正等菩提を求めるとは先ず『大日經』・『大日經疏』所説にある五種三昧耶の①曼荼羅を見ることにより、真言密教に引かれ、「出家得度」して、淨戒律を求學する。これにより師は、行者に菩提種子があることを見て、いよいよ曼荼羅壇に入ることを行者は求める。このように「金剛頂瑜伽中略出念誦經」で説く灌頂の構成についてその後付として『大日經』・『大日經疏』の五種三昧耶の説があることが理解される。

三、幸心流における傳授灌頂につて

幸心流においての傳法灌頂は、現在毎年三月七日より同十四日迄の一週間行われている。しかし受者が増加した為に管長宛下（能化）の開壇に便じて（便壇）灌頂を行う。初会は受者の中から能化を選んだ数人が正受者として、午前三時に丁子風呂に入り身を清め、三時半より闍伽水加持、法案を行い、九時より法要付き三昧耶戒、午後一時より初夜金剛界、三時より後夜胎藏界を受法している。終了後拜殿參拝法案を済ませて、成満となる。第二会よりは順次に行われ、場合によっては二日間に分けて行われることもある。大体一人の大阿に三々四人の受者が受けている。

そこで、幸心流傳法灌頂の意義と構成を見てみると、

①【幸心院灌頂極秘口決抄】

「夫れ灌頂は金剛界會の大日如来、バン字の智水を胎藏大悲本有の衆生の頂上に灑ぎ、菩提心の種子より法性の芽莖を生ず。衆生の百會とは、無明の煩惱、最初の歸處、菩提曼德所聚の根源なり。法性心蓮の杖を以て無漏清淨

の水を灑ぐ。無始輪廻の罪業を滅し、自然性徳之佛體を顯わすなり。

又灌頂は、是れ大日尊の智徳、寶生佛の妙業なり。南方果徳の妙心なり。意の如く寶珠の性徳なり。或いは衆生最初の本体を顯わし、或いはバン字法性の種字を示すなり。

疏に云く達磨馱都を名付けて法界佛の舍利と爲す。亦如来馱都と名づくなり」

とある。注目すべき点としては、『金剛頂瑜伽中略出念誦經』の

「惟願わくは尊者、哀愍し攝受し諸々の最勝子の如く菩提の種子あるを見て、衆生を皆捨て置かざるべし。我今已に菩提心を発し、不退転位を建立せんと欲するが爲の故に、曼荼羅に入ることを求む。惟願くば尊者慈悲教示して、我をして盡く見、一切諸佛と共なる所の灌頂を受け、金剛・寶・蓮華・羯磨を被せしめ、及び本部の有る諸々の勝妙事を、願わくは皆攝受して悉く我に授与せしめ玉へ」

という部分は、いわば灌頂の觀念を示したもので「幸心流灌頂極秘口決抄では功德を示している。灌頂の目的としてこの両者は非常に類似していることが伺える。つまり幸心流においても灌頂の意義と構成は『金剛頂瑜伽中略出念誦經』によるものであることは明らかである。

次に、次第を見てみると、

## ②【動潮傳授手鑑】

「三寶院流洞泉相承決第12」「伝法灌頂三昧耶戒伝聞記」運助（洞泉性善の法兄、報恩院法務寛順に法を受ける）

記には、

「師（動潮）云く。此の灌頂三卷式を「新撰式」という。三寶院権僧正勝覚（1057-1129）御製作也。是より已然野沢通用式を以て執行有る也。古式は、大師御作。又南池院の源仁（818-887）御製作とも云う。或いは又、広

沢の寛朝(916~998)の作とも云う也。是を古式と云う也。尊師仁海(951~1026)の時分、此の式を以て御修行有る也。この他祖師の製作品あり。その後延命僧都元杲の御作の式あり。此を一夜式と云う。合行の通也。是は甚深の式なる故に今の三卷式勝覚御製作あり。来之を用いる也。便ち元杲の式を元となし、御製作有る也。彼れ是れ上古の作法の故に今行ずると相違あること之多し。先ず右古式に対して今の式を新撰の式と云うなり」

(【真言宗全書】)

とある。幸心流で行われる灌頂の次第は、『密教事相体系』には、「幸心流の伝法灌頂では、両部合行の作法では元杲の「一夜式」を用い、初年後胎に分けて行う時は、「野沢通用式」を用いる。しかし、勝覚の「新撰式」によって灌頂を行う」とある。この「一夜式」を勝覚は初夜後夜昼夜に分けて灌頂を行うようになった。これを「三卷式」という。

作法については、『智山全書』英範(1730-1804 智山第27世著)、『伝法灌頂手鑑』六卷(以下六卷式)によるものである。英範は醍醐淳杲和上の門下に入り、幸心一流の秘奥を学び、法流法式に流通した人物である。

この「六卷式」によると、伝法灌頂は、一、三昧耶戒、二、金剛界、三、胎藏界の順番で行われている。しかし、その根底にあるのは先に見た『金剛頂瑜伽中略出念誦経』である。

### 【結論】

以上今回は幸心流における伝法灌頂における意義と構成についての一端を見てきたが、まだ考察すべき点は多大にある。それらは次回のテーマにすることにしよう。

『金剛頂瑜伽中略出念誦経』や『大日経』・『大日経疏』を見る限り、真言密教にとって「灌頂」に対する取り組み

方や意義・構成にその重々しさが感じられる。真言密教における灌頂の次第は、基本的には「金剛頂瑜伽中略出念誦經」によるものである。後にこれを意義付ける為に「大日經」・「大日經疏」・「無畏三藏禪要」（今回は見えないが）を引証してきていることが明白になった。「真言密教の行位体系」を論じる上で「灌頂」という儀式を略することは出来ない。無論真言僧侶にとっても重大な儀式である。前回の結論で出た幸心流における行位「得度↓印可↓傳授（受明灌頂）↓加行↓入壇（伝法灌頂）」という一連の流れに「印可↓傳授↓修法↓悉地」という一つのパターンが組み込まれる事によって本来的な行位が完成することになる。「灌頂準備」に対してやり方順番等に異論は有ると思いが、その一つ一つに意義があるということに「灌頂」の重大さが伺われるのである。

以下次回の下準備としての資料の紹介を付しておくことにする。

#### ※灌頂準備について

現在行われている灌頂の仕度を見てみると、『智山法要便覧』第二集では、以下の通りである。今回は資料の紹介に止める。

- 1、傳授―声明の指南等
- 2、法会事務局の開設―職衆配役張文作成。灌頂準備（堂場荘嚴）
- 3、糸経
- 4、齒木
- 5、折櫃
- 6、散杖

真言密教における行位体系について②

- 7、佛布施
  - 8、佛供
  - 9、諸包並案文
  - 10、香藥
  - 11、綵帛
- これに対して現行の灌頂の典拠となっている『伝法灌頂手鑑』を見ると、
- 1、糸綫
  - 2、齒木
  - 3、五瓶莊嚴の様
    - ・綵帛
    - ・絹織
    - ・香藥
    - ・金胎五瓶飾り
    - ・合香藥
    - ・十裏
    - ・濃紙
    - ・五寶
    - ・五香

・五薬

・五穀

・金剛線

・壇引壇敷

・諷誦文

・請定

・職衆標札

・右方左方張文

・名香包

・五寶包

4、染佛供仕度様

・散杖

・誦経物

・葩鎮

6、鎮守読経理趣経

密教において重大イベントである「灌頂」を執り行うに当たっては、数多の役僧が必要であり、その仕度にもかなりの手間と時間がかかる。『貫三記』には、・開白―「三卷式」読渡、三昧耶戒、金胎次第も読む

・二日―再伝授、三昧耶戒初半

・三日―三昧耶戒後半

・四日―金胎式

・五日―諸加持

五色糸加持金胎受者二氏

受者加持

高座加持―氏表裏

闕伽水加持

五瓶加持

・六日―結願

四通

鎮守読経作法（但し二帖読む有り。作法方を読まず）

※『三寶院洞泉相承口訣』二十七卷之内十一卷（真言宗全集三十四）のちの・鎮守読経

作法十二には、○題名南無大楽金剛不空真実三昧耶経二遍とある。ことから二帖読

むとは『理趣経』を二遍読むことではないか。

或は『伝法灌頂手鑑』には「帰命毘盧遮那仏、無染無着真理趣、生生値遇無相教、

世世持誦不忘念、当山鎮守増法楽、大楽金剛不空真実三昧耶経般若波羅蜜多理趣品

以上二句漢音にして残さず之を読む」とある。このことから『理趣経』を加行読み

することをさすのか。

※ 『三寶院洞泉相承口訣』第十五P 393

・鎮守読経導師作法

『鎮守読経は、受者の傳法成就の為に神明に法案を捧げて祈念するなり。時刻は辰の一點なれども引き上げて卯の尅程に勤めるべきなり。導師は、職衆の中の僧綱已上の人を催すべし。経衆は、職衆の外に催し、或いは又職衆の内なり。人数は、五人・六人・八人なり。乃至十人迄なり。通途は五人迄なり。導師の装束は、鈍色に紫甲の袈裟を付け草鞋を用いずなり。読経の時節受者も参詣聴聞法案なるなり。

次、香爐

次、表白

次、発願

次、衆僧読経

次、香炉を取り止経

次、神分

次、供養淨陀羅尼一切諷誦

次、下禮盤

【現在】

鎮守拜殿荘嚴（拜殿正面に幣ぬさ三本を立てる）  
幣の前に机を置き、香炉佛供二杯（撞佛供）



真言密教における行位体系について②

- 1、役割表
- 2、十二日過ぎ披露支度
- 3、十五日勸学院に張る
- 4、十六日糸絛の日を定める
- 5、止本
- 6、折櫃
- 7、佛布施

中間護摩次第

灌頂は行用次第用う

神供

教授作法

瓶二口（櫛の如し）

灯台二つ（常の如し）

禮盤（或半畳）

左脇机を置く

塗香・洒水・柄香炉常の如し

各に新写の『理趣経』を置く。受者これを書く、又は摺写の経なり  
花籠も経衆の数に随いて設け置く

- 8、名香包、含香包、五寶包、齒木包、金剛線包、投華包、諷誦包、綵帛絹、
- 9、鎮幣
- 10、神供壇
- 11、誦經物
- 12、五色佛供
- 13、壇莊嚴

【三寶院流洞泉相承口訣第十二】『伝法灌頂三昧耶戒傳聞記』運動記

- 三卷式讀渡三箇日
- 盡再傳授五座
- 三昧耶戒傳聞記
- 三昧耶戒儀式